

オランダ語共同訳聖書の特徴について

北村彰秀

(モンゴル聖書宣教会)

1. はじめに

近年、特に高い評価を得ている聖書翻訳として、ドイツ聖書協会のドイツ語訳聖書と、オランダ聖書協会のオランダ語共同訳がある。ドイツ聖書協会訳は日本聖書協会が、聖書の日本語訳にあたって絶えず照合チェックに利用しているほどであり、またオランダ語共同訳は「驚異的ベストセラーとなった」(日本聖書協会翻訳部 2006, p.486)とのことである。オランダ語共同訳については、すでに出版前から Wilt (2003, p.255)が4ページ以上を割いて言及していること、また Wendland (2004, p.407)が3ページ以上を割いて言及していることから、この訳に対する聖書翻訳関係者たちの注目度を知ることができる。ドイツ聖書協会訳は Good News Bible の流れをくむものであると思われるが、オランダ語共同訳は、多少翻訳方法が異なっているようである。そこでここでは特にオランダ語共同訳の特徴に注目し、これがナイダ(Eugene Nida)の dynamic equivalence を中心とする翻訳理論に対する修正を意味するのか、あるいは新しいアプローチが出てきたと見るべきなのか、ナイダの理論はどうなったのか等、検証し、またまとめてみたい。

2. 本論

ここでオランダ語共同訳と呼んでいるものは2004年、オランダ聖書協会から出版されたもので、日本聖書協会の言い方にならって、オランダ語共同訳とよぶことにする。いろいろな言語のいろいろな種類の聖書が絶えず出版されているわけであるが、特にオランダ語共同訳が話題となっているのは、非常なベストセラーになったこと、また、翻訳方法が注目に値するものであるためと思われる。

まずこのオランダ語聖書の特徴はどのようなものか、まとめてみる必要がある。しかしわたし自身、オランダ語は必要に迫られて学び始めたものであり、力不足の面もあるため、まずこの訳の特徴について記した、日本語および英語文献で入手できたものにあたってみて、まとめてみたい。そして必要に応じて、オランダ語聖書自体にもあってみることとしたい。この訳の特徴は、いくつかの文献からまとめてみると以下ようになる。

オランダ語共同訳について述べた日本語文献としては、ド・フリス(2006)がある。それによる

とこの訳の主な特徴は以下のとおりである。

1. 文学的な訳である。
2. 翻訳にあたっては使用語彙数を限定しない。
3. 原典のジャンルによる文体の違いを残す。
4. 訳語は統一せず、文脈により訳語を変化させる。
5. 教会内機能をもつものである。すなわち、教会用である(p.284,288)。

ド・フリスの特に強調しているのは、文学的であることと、英語の RSV と GNB の中間的な訳である NIV のような中間的な訳であることである。(どういう意味で中間的であるのかが問題であるが、ここでは、とりあえず「くだきすぎない訳」「やさしくしすぎない訳」としておく。)ド・フリスの立ち位置ははっきりしており、それがスコプス理論であることは、すぐにわかる。すなわち、読者は誰であるのか、用途はどうであるのかにより、翻訳は異なってくる。そのようなことから、彼は聖書の複数訳の存在意義を認め、「あってもよい」ではなく、むしろ「あるべきである」と主張している。

この訳の出版前の予告としての言及である de Blois (2001)によると、この訳の特徴は以下のとおりである。

1. **Functional equivalence** と **formal equivalence** の中間的な訳である。あるいはよりフォーマルな次元の(つまり日常語やスラングの反対の方向の) **functional equivalence** である。
2. 教会使用を第一とするが、一般社会の必要をも満たすものであり、オランダ語を母語とする知識人を対象とする。
3. 説明的な訳にしすぎず、例えば、パウロの意味のあいまいな属格構文はそのまま残す(例えば、コリント二 13:13「聖霊の交わり」という表現は、「聖霊との交わり」、あるいは「聖霊の内にある信者どうしの交わり」の2つの意味にとれる)。(なお、属格構文についてはド・フリスも言及している。)
4. 訳語を統一しすぎず、場合により違った訳語を用いる。
5. 地域色を残す。つまり翻訳時に文化的変更を加えない。(例えば、祭司が羽織やはかまを身に着けるとい訳にはしない。)

なお、Wilt(2003,p.255-257)にもオランダ語共同訳についての言及があるが、これは上記の文献をまとめたものである。

オランダ語共同訳の出版後に書かれたものとして Buitenwerf (2005)を見ると、以下のように特徴が記されている。

1. カトリック、プロテスタントの共同の訳である。
2. **Good News Bible** のように訳語を制限しない。(つまり原文に難しい用語が出てきた場合、それをやさしい単語に置き換えることはしない。)
3. 原文の文体を生かす。
4. 韻文については、オランダ語の詩の脚韻や韻律を取り入れない。
5. 現代化しすぎず、外国風の感じを残す。

(以上、3者のコメントについての括弧内の説明は原文にはなく、私に加えたものである。)

次に、1つ1つの特徴について見てみたい。

まず、文学的な訳であることが強調されている。文学的な訳の必要性についてはナイダ自身も、例えばナイダ(1969, xi)において、「真に満足のいく翻訳は、常に一つの芸術的創造である。」と述べ、翻訳が芸術的(文学的)であるべきことを主張している。しかし、ナイダ自身は、文学的翻訳の方法論を扱うことができなかった。そして、そのような仕事は Wendland の手によってなされたが、文献としては Wendland (2004)があり、また Wilt (2003)の p.179-230 には、やや短くまとめられて記されている。彼の方法論は広く受け入れられているようであり、NIV, CEV, ドイツ聖書協会訳などは文学的訳を目指している。つまり文学性ということも考慮に入れて訳している。オランダ語共同訳も彼の方法論によっているとみてよいであろう。この訳の巻末に翻訳にかかわった人物のリストがあるが、それを見ると翻訳チーム(オランダ語で *vertaalteam* と記されている)には 30 名の名前があげられているのに対し、作家(オランダ語で *literatoren*)には 62 名もの名前があげられている。この人数だけからも、文学的訳に対する意気込みがある程度見てとれる。(なお、オランダ語 GNB とオランダ語共同訳には、翻訳にかかわった人物が記されているが、これは今までの聖書翻訳にはあまり見られなかった特徴である。欽定訳その他の英訳、また日本聖書協会の訳等でも、翻訳者のリストは記していない。)

訳語を統一しすぎず、文脈によって変えるという方法も、すでにナイダにより言及されている。すなわち、古い訳では、原文に忠実に訳そうとするあまり、訳語を統一しすぎて、わかりにくい訳、あるいは不自然な訳になっているとの言及がナイダ(1969, p.23-25)にある。

ジャンルによって文体を変えるという方法も、ナイダ(1969, p.18)にすでに指摘されているとおりである。しかし特にオランダ語共同訳の特徴として言及されているのは、今までのいろいろな聖書翻訳において、必ずしもジャンルによる文体の違いが十分に実現されなかったからであろう。例えば、韻文の特徴として、詩編 1:1 のオランダ語共同訳には「...は幸いである。」というところに *be* 動詞(ここは存在の意味をあらわさないため、より正確には連辞というべきであろう)がないということについては、Wendland(2004, p.407)がすでに指摘している。彼の文献もオランダ語共同訳も同じ年に出ているため、彼がどうやってこのことを知ったのかということが問題であるが、出版前のものを入手できたとのことを彼は同じページの脚注で断っている。)これ以外でも、例えばマタイ 5:3-10 において、「...は幸いである。...は幸いである。」というところも、*be* 動詞を用いない表現になっている。この2か所はオランダ語共同訳よりも少し前に出版されたオランダ語GNBでも *be* 動詞を使わない表現になっている。例えば詩編 1:1 は、いずれの訳でも、“*Gelukkig de mens ...*”となっている。しかしオランダ語 HTB では“*Gelukkig is de mens ... (Happy is the man ...)*”となっている。オランダ語のことわざ、格言、詩などにおいて *be* 動詞がどの程度使用されるか、あるいは省略されるかはわからないが、少なくとも最近出版された2つの訳の韻文において、*be* 動詞省略(あるいは不使用)という方法がとられていること、またこのような方法をとっていない訳もあることは確認できる。

なお、箴言については、例えば 12:4「有能な妻は夫の冠。」というところは、オランダ語の共同訳、GNBともに、*is* という *be* 動詞を用いて訳している。例えばオランダ語共同訳では以下のようになっている。

Een sterke vrouw is een krans voor haar man,

(英語に重訳すると A capable wife is a crown for her husband,)

これは上記の場合とは異なり、述部に形容詞ではなく、名詞を用いている文であることを考慮すべきであろう。

箴言 25:2 には「ことを隠すのは神の誉れ ことを極めるのは王の誉れ。」という言葉があるが、これについても見てみたい。これをオランダ語共同訳では以下のように訳している。

Eer aan God, omdat hij dingen verbergt, eer aan de koning, omdat hij dingen onderzoekt.

(彼がことを隠すがゆえに誉れは神に、彼がことを精査するがゆえに誉れは王に。)

すなわち、主節と思われる部分が不完全文となっている。オランダ語GNBでは以下のようにある。

We geven eer aan God omdat ..., we geven eer aan de kenig omdat (...ゆえに我々は誉れを神に帰する、...ゆえに我々は誉れを王に帰する。)

この訳では完全文になっており、格言やことわざというよりは、普通の散文に近い表現になっている。

オランダ語 HTB(ネットで利用可能な現代オランダ語訳)でも(訳文はいちいちあげないが)動詞省略などはせず、普通の文に近く、特に前半と後半の間に *maar*(しかし)という接続詞まで使われている。

なお、原文は不定詞を用いた表現であり、直訳すれば「ことの隠匿——神の誉れ、しかし、ことの探求——王の誉れ。」となるであろう。一般にヘブライ語では、散文、韻文を問わず、「である」というときの *be* 動詞は用いられない。また、ここに出てくるヘブライ語の接続詞 *we* (しかし)は極めて短いものであるため、オランダ語の *maar* あるいは英語の *but* で訳すと、多少くどい感じ、あるいは強調の口調になることは否めない。

この部分の他の訳を見ると、英語の欽定訳、NIV、CEV、あるいはまたドイツ聖書協会訳いずれも *be* 動詞あるいはその他の動詞のある訳であり、特に欽定訳では *but* という接続詞まで使われている。ということは、これらの訳は箴言(格言集)の文体ではない。また、欽定訳は接続詞があることから、かなり原文寄りである。

欽定訳は多くの場合ヘブライ語の接続詞をそのまま訳していることは注目すべきである。例えば創世記 10:2 は次のようになっている。

The sons of Jaheth; Gomer, and Magog, and Madai, and Javan, and Tubal, and Meshech, and Tiras.

接続詞が非常に多いが、接続詞の位置も数もヘブライ語原文のままである。

接続詞の使用についてももう少し見てみよう。創世記 1:3, 6,9 等ではオランダ語 GNB では「そして(*toen*, 英語の *then*)神は言われた。」となっているが、オランダ語共同訳では、「そして」がなく、「神は言われた。」となっている。なお、英語の聖書では NIV では *and*, GNB では *then* が用いられ、ドイツ聖書協会訳でも *da* や *dann* (いずれも日本語に訳せば「そこで」であろうか)が用いられているが、英語のCEVでは接続語なしとなっている。古い訳では、欽定訳では *and*, ルター訳では *und* によってつながられている。

原文のヘブライ語では、*wa·*が用いられている。(・は次の子音が重子音となることを示す。)

英語に直訳すれば **and** である。「そして神は言われた。...そして神は言われた。...そして神は言われた。」と続く文章は独特の響きを感じられ、これがいいのだと思われる方も多いであろう。しかし現代の日本語の小説の文章では、「Aは言った。...Bは言った。...Aは言った。...」という言い方の方がふつうである。英語でも、**And A said** という言い方に出会うことはかなりまれである。英語では **Then A said** という表現は時にはあるかもしれないが、これもかなりまれである。オランダ語の場合も英語と同様であるとすれば、オランダ語共同訳では、現代の小説に近い文体になっていると言ってよいであろう。すなわち、原文の味わいを残す訳し方ではないということになる。欽定訳の文学性はある程度、原文の味わいを残すことに起因しているが、オランダ語訳では、それとは異なり、現代語志向という方法をとっているようである。

なお、創世記1章では神のみが語っているため、普通の二者あるいは三者の「会話」ではないということは考慮しておくべきであろう。また、ついでながら、ここで使われているヘブライ語の動詞 *'amar* は、「話す」「語る」のみならず、「思う」「考える」という意味も持っているため、これが音声を伴う発言であると言えるかどうかとも疑問である。そのため、GNBでは **commanded** となっている。つまり、音声言語ではないという解釈の余地も残している。

次に、オランダ語聖書は特に教会使用ということを考えて訳されたということが記されている。GNBの前文等によると、ナイダの唱えた方法によって訳された GNB は主として家庭など、教会以外の場所で読まれることを想定して訳され、そのため、古風な表現、堅苦しい表現を避け、わかりやすい現代語で訳されたとされている。また、欽定訳のような訳は教会での使用が好ましいとされている。ナイダ(1973, p.44)にもそのような言及があるし、また、ド・フリス(2006)にもそのような言及がたびたびある。例えばド・フリスによれば、「NIVは教会の聴衆のための訳なので、...教会外の人々にも明瞭であることは目指していない。」(p.262)「共同訳は教会内機能を持ち」(p.284)「共同訳は教会向けの機能と文学的機能をもっていたので」(p.288)とある。これは一考を要すると思われる。そのため、ナイダの働きがどのようにして始まったか、そしてナイダの学説や翻訳方法がどのようにして形成されていったかを見てみたい。

ナイダはアメリカ聖書協会の翻訳コンサルタント(正式の役職は時により異なっているかも知れない)として、長期間聖書翻訳の働きと研究にかかわり、それが彼の思想形成に強い影響力を及ぼし、また、彼自身も、聖書翻訳界に強い影響力を及ぼしてきた。宣教師としてメキシコにいたことがあり、その後アメリカのカリフォルニア州に住んでいたことから、スペイン語圏、あるいはアメリカ多民族社会に関心を向けざるをえなかったであろう。彼の所属団体の翻訳である **Good News Bible** の働きはまずスペイン語訳から始まり、その後英語訳が出るのであるが、彼自身これらの訳に深くかかわってきた。(聖書協会の翻訳コンサルタントとして、それ以外の訳にもかかわった。)ラテンアメリカにはいろいろな民族が居住しているし、スペイン語を母語としない者も多い。またアメリカも多民族社会である。そこでナイダは、広く使われる言語に訳すことにより、広範囲に使用可能な聖書を作ろうとしていたことがわかる。

確かに、1つの言語で用が足りれば、出版、ラジオ、テレビ等のマスコミ、教会の集会、その他の集会、議会等にとって、非常に便利である。同時に5つの出版物を用意しなければならないとか、A, B, C, 3つの言語のための通訳者が同時に必要となれば、その手間と経費は計り知れないものとなる。

しかしこれは支配者側(あるいは為政者側)、多数派の見方である。少数派の側からは、これとは別の主張が出てくるとも考えに入れなければならない。たとえば、スペイン語でニュースが配布されるのだが、よくわからないところがある。自分たちのことばを子供たちにしっかり教えたいのだが、十分な教材がない等々。

欽定訳のような聖書は教会使用に好ましく、Good News Bible のような聖書は家庭で読まれるのにふさわしいと思われることが多いが、実際はこの逆である場合も多いということを考えに入れなければならない。例えばある教会で、英語を母語とする者が 40 名、中国語を母語とする者が 10 名、日本語を母語とする者が 10 名というような場合には、GNB のような訳は会衆全体に理解され、便利である。しかし、自宅では、英語を母語とするものは欽定訳を読み、外国人はそれぞれの母国語の聖書を読むということも十分に考えられる。そのため、「教会使用」というのではなく、もう少し限定して「教会の儀式での使用」あるいは「教会における儀式的な集会での使用」としたほうが正確であろう。また、GNB は子供にもわかりやすいということで家庭使用に好ましいとみなされるのかもしれないが、性に関する表現もわかりやすくしてあるため、必ずしも子供向けとはいえないであろう。(例えば創世記 19:5 では sex という語が出てくるし、またマタイ 1:25 では sexual relations という表現が出てくる。)

Good News Bible の序文を見ると、「この訳は英語を母語としない読者をも想定している」という内容のことがはっきりと書かれている。そのため、多言語社会におけるコミュニケーションの手段としては便利である。これを朗読すれば、あるいはここから引用すれば、外国人にも理解してもらえる。しかし、英語を母語とする者、しない者の両方を読者として想定したということは、それによるデメリットもあることを考えなければならない。まず英語を母語とする者からは、わかりやすい訳ではあるが、もっと英語の豊かな語彙を活用してほしいという思いが起こってくるであろう。また、英語を母語としない者からは、確かに英語になれるためには便利であるが、自分たちの母国語の聖書の水準には達していないのではないかという疑問が出てくるかもしれない。英語あるいはスペイン語学習用の聖書を作るということ自体がおかしいのではないかと主張する者もあるであろう。要するに、二種類の読者を想定すると、それぞれの読者の希望、要求を最大限に満たすことはできなくなる。

オランダ語共同訳は、このような、二種類のグループを同時に考えることを避け、オランダ語を母語とする者のための訳としている。オランダ語共同訳とともにオランダ語GNBも少し前に同じ出版元から出版されているが、二つにわけることにより、目的達成によりよい効果をあげることが期待されているものと思われる。ナイダ自身も、先に述べたとおり、複数訳の意義あるいは必要性を認めている。ただし、複数訳の存在理由の説明は必ずしも十分ではなかった。その後、スコプス理論の出現により、複数訳の存在理由の深い議論が可能となってきた。そしてオランダ語の場合は、オランダ語共同訳の出た 2004 年に、オランダ語 GNB の第 12 版が出ているし(私の手元にある)、しかもどちらも、オランダ聖書協会とカトリック聖書協会の合同の出版物として出ている。すなわちオランダにおいては、複数訳の存在意義が強調される結果となっている。このことは、先に述べたド・フリスの「複数訳が必要」との主張ともよく符号している。

オランダ語を母語とする者を読者として想定することにより、語彙を制限する必要はなくなったと思われるし、より原文寄りの訳(直訳に近い訳)でも理解されることが期待できるようになったと

思われる。

翻訳の際、原語には手を加えるが、文化的変更は加えないということも、ナイダ(1973, p.16)によってすでに主張されていることである。そのため、翻訳は異国情緒を残すものとなる。また、オランダの詩の脚韻や韻律はオランダの文化と考えられるため、用いられていない。(あるいはこれはオランダの脚韻や韻律を取り入れると翻訳の際の語彙の選定がせまられるためか。)

ナイダの唱えた *dynamic equivalence* という方法によって GNB が翻訳されたことはよく知られている。その後、この *dynamic equivalence* は *functional equivalence* と言い換えられるのであるが、Kerr (2011)においてはこの二つは異なるものとして扱われ、また Wilt (2003, p.234)では、2つの区別はもっとはっきりしている。オランダ語共同訳はどのような原則によるものであろうか。De Blois (2001) をみると、まずはじめは *functional equivalence* と *formal equivalence* の中間であると述べている。しかしその次には、言語の *higher, more formal level* での *functional equivalence* であると述べている。そしてさらに先へ進むと、*undeniably functional equivalence* と書かれている。これをみると、de Blois 自身も、どのような表現をしたらよいのか、どのような用語がふさわしいのか、迷いが見られるようである。彼の書いたものにそってオランダ語共同訳の特徴を記述している Wilt (2003, p.255)ではなんと、オランダ語共同訳の翻訳方法は *functional equivalence* ではなく *dynamic equivalence* であると書かれている。翻訳方法の名称がまだ、十分に統一がとれていないようである。これはできるだけ早く、対応策を見つけるべきであろう。

オランダ語共同訳がベストセラーになったということは、人々が何を求めているかということを考え直す機会でもあろう。たしかに、聖書を手にするほどの者はある程度の知識人であるに違いない。挿絵を必要としない層であるかもしれない(英語の GNB は挿絵付きのものが多いが、オランダ語共同訳は、少なくともわたしの手元にあるものは挿絵なしである。)また、ある程度難しい単語や用語も理解できる人たちである。また、やさしいものほど好まれると単純に考えるべきではない。大学の物理学や数学の講義は、必ずしもやさしいほど好まれるわけではない。高等数学と取り組むこと、あるいは格闘することにさえ喜びを覚える人たちもいるのである。また、自然さが好まれ、不自然さは好まれないと単純に結論付けることはできない。例えば、漫才などで不自然な表現が出てくると、興味をそられる。そして何よりも、文学に対する大きな需要は日本のみならず、世界的なものであろう。

また、オランダ語で同じ出版元から2つの聖書がほとんど同時に出版されたというのは、興味深い事例を提供している。このような方法は手間も2倍近くかかるし、売り上げにも悪影響が懸念される。内外から批判の声は出なかったのか、批判にはどのように対応したのか。宣伝はどうしたのか。それぞれの訳の売り上げにはどのように影響したのか。同時出版することにより、それぞれの訳に対する信頼度は高くなったのか、低くなったのか。経済面、あるいは聖書の普及等々、いろいろな面で、よい方法であったと言えるのか、言えないのか。興味はつきない。

また、2つの訳の同時出版により、それぞれの訳を比べてみることもでき、*functional equivalence A* と *functional equivalence B* (用語についてはいろいろな問題があるが、仮にこうよぶことにする)で訳語その他翻訳方法の違いはどうか、興味ある資料を提供している。

また、ナイダの方法、聖書協会の方針、方法がどうなったのかということさをさぐるためには、同時出版されたオランダ語 GNB の特徴をも見なければならぬであろう。この訳の序文にはナイダ(1973)の原著があげられているほどであり、ナイダの説くところに忠実に従っているものと思われる。この訳の検討、またオランダ語共同訳との比較については、これからの課題としたい。

3. 結論

以上、すでに知られていることに私なりの再評価も多少加え、その中でオランダ語共同訳の性格を明らかにしようとしてきたが、箇条書きでまとめると以下のようなになるであろう。

1. 英語において、欽定訳や RSV, GNB, NIV という歴史と同じものを、オランダ語訳においてもたどることができる。すなわち、伝統訳、オランダ語 GNB, オランダ語共同訳である(保守的な訳、わかりやすい現代語訳、中間的な訳の順)。

2. ナイダの GNB は 2 種類の人たちを対象としたものであったが、そのところに多少無理があった。オランダ語共同訳ではこの点は改善されている。

3. オランダ語共同訳の訳し方については、まだ呼び方が十分定まっていない。このことは、単に用語の問題のみならず、翻訳方法全体としての把握が研究者側では十分でないことを反映していると思われる。

4. オランダ語共同訳は、韻文における連辞「...である」の省略、「そして神は言われた」という表現における接続詞の省略(あるいは不使用)が見られ、よい文体形成に対する配慮がうかがえる。特に接続詞の省略(あるいは不使用)は、英訳で GNB よりも質が高いと思われる CEV にも共通する特徴であることが注目される。強い文学的文章志向が認められる。(この文学的翻訳の手法は、原文の味わいを残す欽定訳とは多少とも異なったものである。)語彙数を制限しないという方針も、文学性追求と深くかかわっていることは明らかである。(使用語彙が制限されると、いろいろなおもむきのある表現ができなくなってくる。)

5. いろいろな面で中間志向である。学者向けの難しいものではなく、部外者(今までキリスト教、聖書に接する機会がなかった者)向けといえるほどやさしくもない。また、バリバリの儀式用言語(...したてまつり候)でもなく、友人とのくだけた会話ほどくだけた文章でもない。用語もやさしすぎず、難しすぎない。カトリック専用でもなく、プロテスタント専用でもない。過度に原文寄りではなく、過度にオランダ語寄りでもない(すなわちいわゆる直訳、意識の中間)。中間志向とすることにより、売り上げを増やす結果ともなるであろうし、また、使用上の利点もいろいろあるであろうと思われる。

6. しかしながら、このような方法が決して絶対、万能ではないということも、同時にオランダ語 GNB を出すことによって、出版元みずから証言している。(ただし、カトリック専用でも、プロテスタント専用でもないという点においては、オランダ語 GNB も同様であるが。)

7. オランダ語共同訳は、欽定訳や RSV のような伝統的な原文寄りの訳と GNB のような訳の中間をゆく訳文の中で文学性を出そうとしている。つまり、中間的な訳こそが、最大限に文学的な訳になりうると主張しているように思われる。これは、ドイツ聖書協会訳が、英語の GNB のような dynamic equivalence の訳文の中で文学性を出そうとしているのと対照的である。ドイツ聖書協会訳は、Gute Nachricht Bibel (よきおとずれの聖書)という名前からも、GNB の系統の訳

であることは明らかである。なお、さらにいえば、文学的であると言われる欽定訳は *formal equivalence* の訳である。欽定訳、オランダ語共同訳、ドイツ聖書協会訳において実現している（あるいは実現させようとしている）文学性はどのような共通性があり、またどのような違いがあるのか、さらに研究が必要であろう。

.....
【筆者紹介】

北村彰秀(KITAMURA Akihide) モンゴル聖書宣教会所属。モンゴル語訳聖書の翻訳、出版、販売に携わる。また、東洋における翻訳の伝統の研究、聖書翻訳との比較を行い、あるべき翻訳のすがたを探る。連絡先:a_kitamura07@yahoo.co.jp

.....

【取り上げた聖書の訳】

ここで取り上げた聖書の翻訳を以下にあげる。なお、括弧内はここで用いた略称である。

King James Version (1611)(欽定訳)

Revised Standard Version (1971) (RSV)

Die Biebel nach der Übersetzung Martin Luthers (1561)(ルター訳)

Biblica (1996) *Het Boek* (オランダ語 HTB)

[Online]<https://www.biblegateway.com/versions/Het-Boek-HTB>(2018年5月15日現在)

Nederlands Bijbelgenootschap (2004) *Bijbel – Die Nieuwe Bijbelvertaling*, Haarlem.(オランダ語共同訳)

Nederlands Bijbelgenootschap (1996) *Groot Nieuws Bijbel – Die Nieuwe Bijbelvertaling*, Hilversum.(オランダ語 GNB)

Deutsche Bibelgesellschaft (1997). *Gute Nachricht Bibel*.(ドイツ聖書協会訳)

Deutsche Bibelgesellschaft (2000). *Gute Nachricht Bibel (Revidierte Fassung)*.(ドイツ聖書協会訳)
 (新正書法によるもの)

American Bible Society (1976). *Good News Bible -- The Bible in Today's English Version*.(GNB)
 (この訳はその後何回か改定されている。イギリス英語版も出ている。)

American Bible Society (1995). *The Contemporary English Version*. (CEV)

Zondervan Bible Publishers (1978).

The Holy Bible -- New International Version. (NIV)(1973).

【付記】

聖書の翻訳は同時に、あるいは時とともにいろいろな大きさのものやいろいろな表紙のもの等が出ることが少なくない。また、同じ訳が多少形を変えて別の出版社から出ることもある。時とともに訳文が改善されることは非常に多い。そのため、上記の情報中の出版社と出版年は、必ずしも他の情報を誤りとするものではない。

【参考文献】

- Beekman, John and John Callow (1974) *Translating the Word of God*. Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House.
- de Blois, Kees F. and Tamara Mewe (2001). Functional Equivalence and the New Dutch Translation. *The Bible Translator Vol.52, No. 4*, 430-440.
- Buitenwerf, Rieuwerd (2005) The New Dutch Translation of the Bible: Principles, Problems, and Solutions. *The Bible Translator Vol. 56, No. 4*, 253-261.
- Kerr, Glenn J. (2011) Dynamic Equivalence and Its Daughters: Placing Bible Translation Theories in Their Historical Context. *Journal of Translation. Vol. 7, Number 1*. 1-19.
- Wendland, Ernst R. (2004) *Translating the Literature of Scripture — A Literary-Rhetorical Approach to Bible Translation*. Dallas, Texas: SIL International.
- Wilt, Timothy (ed.) (2003) *Bible Translation — Frames of Reference*. Manchester, UK & Northampton MA: St. Jerome Publishing.
- ローレンス・ド・フリス(2006)「聖書翻訳と信仰共同体」『国際聖書フォーラム 2006 講義録』239—290 日本聖書協会
- 北村彰秀「翻訳における芸術性の追求」『翻訳研究への招待』No. 12 (2014) [Online] honyakukenkyu.sakura.ne.jp (2018年5月15日現在)
- E. ナイダ他著、沢登春仁他訳(1973)『翻訳——理論と実際』研究社
- E. ナイダ著、成瀬武史訳(1972)『翻訳学序説』開文社
- 日本聖書協会翻訳部編「シンポジウム報告」「あとがき」『国際聖書フォーラム 2006 講義録』479—488 日本聖書協会